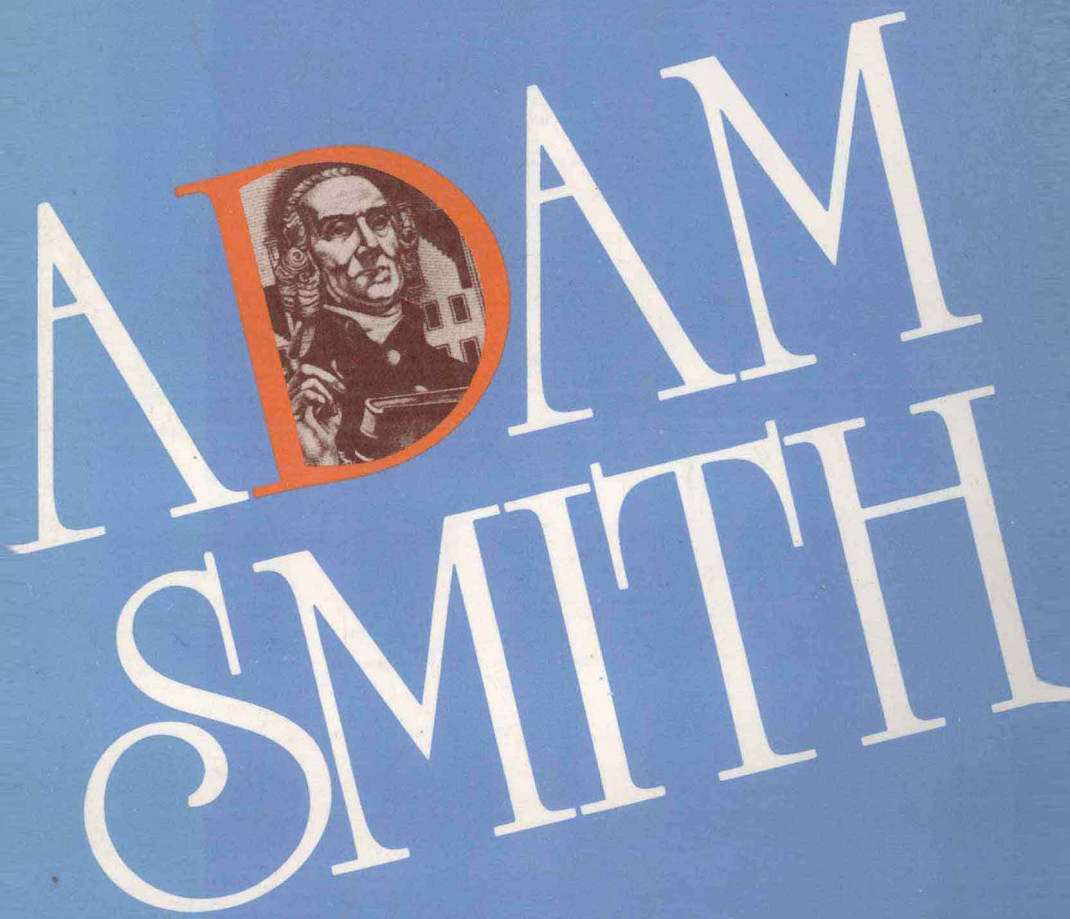
アダム・スミス伝

R・H・キャンベル
A・S・スキナー 著　久保芳和 訳



東洋経済新報社

アダム・スミス伝

R・H・キャンベル
A・S・スキナー 著　久保芳和 訳

東洋経済新報社

Original Title
ADAM SMITH
By R. H. Campbell & A. S. Skinner

Copyright © 1982 by R. H. Campbell and A. S. Skinner
Japanese translation rights arranged with Croom Helm Ltd.
through Japan UNI Agency Inc.

序文

アダム・スミスは、その生前においても死後においても、同僚学者や公生活にある人びとによって引用されるという、稀れな特徴をもっている。彼はいろいろな理論や政策や行動に、権威を与えるものとして認められてきた。しかし彼を是認しようとする多くの人びとは、彼について知るところが比較的少ないのである。われわれの伝記がねらっているのは、まずこのような読者である。もっと一般的にいえば、スミスに関するわれわれ自身のこれまでの著作を通じて築きあげた知識を利用して、われわれは、知的努力および公共政策におけるスミスの永続的な影響力の本質を理解しようとするすべての人びとに、スミスの人と著作を紹介しようと試みた。この伝記におけるわれわれの目的は、そのいずれかについて知ることの少ない人びとに、入門書を提供することにある。われわれは、本書に寛大な助力を与えられたI・S・ロス教授の構想されているようなタイプの、詳細でかつ十分実証的な伝記を提供しようとしているのではない。

スミスの入門書を書こうとすると、短いものでさえ、二つの大きな困難に遭遇する。第一は、スミスの個人生活に関する記録は、僅かしか残っていないということである。スミスの生活の多くは隠遁的学者として費やされたのであり、したがって、いかなる場合においても、後世人を刺激するような事件はわずかしか生みださなかった。そのうえ、彼は名うての筆不精ときていた。それゆえ、彼の伝記者たちは、限られた資料、それもしばしば周辺の資料を駆

使して作業しなければならなかった。第二の困難は――それは魅力的な機会でもあったが――、スミスの知的関心は多くの者が気づいているよりもずっと広く、彼の周知の著作である『国富論』よりもずっと範囲が広く、その中心にある経済思想よりもはるかに広がりがあるということである。以上の二つの困難がわれわれの伝記の特徴の若干を決定した。われわれの伝記にはギャップがあり、われわれはこれを埋めたいと思ったが、これを達成するには、想像的虚構に近い思索をめぐらすことによってのみ、それができるのである。これを補うために、本書では、スミスのいろいろな著作を利用することによって、これらに中心的地位を与えることができた。いずれにしても、これらの著作を強調することは妥当である。スミスの生涯は彼の時代に対する興味ある洞察を与えてくれるものであるが、彼の同時代人の幾人かについての研究も同様であろう。そして彼の著作は本当に素晴らしいものである。彼の方法あるいは結論こそ、その当時の論争点および問題に関連があると考える人びとは、スミスの著作を最も興味深いものとみるであろう。そういう理由のために、われわれは彼の著作の主要な特徴を説明しようと努めるとともに、それらがどの程度まで彼の生涯に起った主要な事件と結びつけることができるかを、可能な限り知ることが重要であると指摘したのである。

この伝記においては、この分野でのわれわれの以前の著作に頼ることにしたが、反復を避けるよう努めた。ただ、第10章の中の一つの場合だけは、『社会科学体系』※(Clarendon Press, 1979) の一一二―四ページに現われる章句を利用した。

スミスの著作は、今日では、クラレンドン・プレス社発行のグラスゴウ版『アダム・スミス著作集』(Glasgow edition of the Works and Correspondence of Adam Smith) によって見ることができる。右のグラスゴウ版および関連諸版の諸巻に依拠することを許されたことに感謝する。本書中で利用された他の著作に対する謝意は、各章末の

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

注で示しておいた。本書のような著作がどれほど多くを他の人びとの学識に負うものであるかを、われわれ両人はよく承知している。

グラスゴウ版は次の各巻から成っているが、引用の場合は次の略号を用いた。

I. *The Theory of Moral Sentiments*
(eds. D. D. Raphael and A. L. Macfie) *TMS*.

II. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*
(eds. R. H. Campbell, A. S. Skinner and W. B. Todd) *WN*.

III. *Essays on Philosophical Subjects EPS*.
(eds. W. P. D. Wightman, J. C. Bryce and I. S. Ross), including Dugald Stewart, *Account of the Life and Writings of Adam Smith. Life of Smith*.

IV. *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*
(ed. J. C. Bruce) *LRBL*. この版はまだ出版されておらず、本書では J. M. Lothian 版（一九六三）を用いた。

V. *Lectures on Jurisprudence*
(eds R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein). Report of 1762–63 *LJ*(A) and of 1763–64 *LJ*(B).

VI. *Correspondence of Adam Smith*
(eds. E. C. Mossner and I. S. Ross) *Corr*.

手書きの原稿はJ・フィンレイソン夫人、M・ヘンドリ嬢、およびC・マックスワン嬢がタイプして下さり、草稿

はD・W・ベビントン博士、D・スティーヴンス教授およびD・ウィンチ教授が下読みして下さった。われわれ両人はこの方がたの助力と協力に感謝したい。

R・H・C
A・S・S

※ これは田中敏弘・橋本比登志・篠原　久・井上琢智訳『アダム・スミスの社会科学体系』未来社、一九八一として訳出されている。

凡例

一　本書は、R. H. Campbell and A. S. Skinner, *Adam Smith*, Croom Helm Ltd., London, 1982 の全訳である。

二　原書中のイタリック部分は、訳文では傍点で示したが、それが書名の場合には『　』で示した。

三　訳文中の（　）〔　〕は著者の付したものであり、〈　〉は訳者が補ったものである。

四　訳文に付したアラビア数字は原書の注であり、和数字は訳者の注である。それぞれ各章末に一括してある。

五　スミスの著作のうち、邦訳のあるものは概ねそれらを参照し、スミスの『書簡集』からの引用のうち、レー『スミス伝』（大内兵衛・大内節子訳）にすでに訳出済みのものについては、その訳文を利用させていただいた。

目次

序文
1 カーコーディ 1
2 学生としてのスミス 11
3 エディンバラ 25
4 グラスゴウ大学へ 45
5 大学行政 54
6 グラスゴウ市 66
7 修辞学講義および言語の最初の形成に関する諸考察 76
8 初期の著作 94
9 道徳感情論 112
10 法学講義 132
11 バックルー公爵付き家庭教師 150
12 ロンドンとカーコーディ 171

13 ロンドン、一七七三―一七七六 190
14 国富論 212
15 ヒュームの死 235
16 関税委員 251
17 最晩年の日々 270
訳者あとがき 287
索引 289

1 カーコーディ

カーコーディ市は一七二〇年代までに確立していた。早くも一三〇四年には「スコットランドで最古の市の一つ」であったといわれるが、町の発展には時間がかかり、勅許都市としての最終の勅許状は一六四四年二月五日に与えられたのだから、そのような言い分は誇張であったかもしれない。[1] フォース湾岸、とりわけファイフ州の南東部では、カーコーディはクレイルからバーンティスランドまでの沿岸にある、ひと続きの九つの勅許都市の一つであったから、その地位は決して特異なものではなかった。いくつかの都市は、ダイサートとカーコーディのように、互いに非常に近接していたから、徐々に合併された。勅許都市の間には、男爵領や国王直轄地――レーヴェン、メーシル、アバーダー、ウェスター・ウェーミス――が散在し、全部ではないが多くの都市は一七世紀に勅許を受け、まもなく勅許都市としての古くから確立していた権利と特典に挑戦した。多くの場合、異なった経済的利害や社会構造をもつ、地理的には別個の、非都市的な数個の社会が、カーコーディに近接して存在し、同一教区にはないものの、グラスゴウと有効につながっていた。例えば、アボットシャル教区のリンクタウンはグラスゴウの南西部と結びつき、ダイサート教区のパスヘッドとギャラタウンはグラスゴウの北東部と結びついていた。カーコーディ教区そのものは小さく、アレグザンダンダー・ウェブスターが一七五五年に人口調査を行った時の人口は二二九六人であったが、[1] 地理的には、「長い町」(lang toon) と称するのがふさわしかった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

市の行政は市議会の手中にあり、その責務は、聖職叙任、貧民救済、それに特にアダム・スミスに関連していえば、市立学校といった通常の分野にわたっていた。ご多分にもれず、この市も必ずしもうまく統治されていたわけではなかった。スミスの生誕の年には、市有地の借地人たちは彼らの地代を支払うことができなかったので、この市に課された税の支払援助を求める請願が、勅許都市会議に出された。同時に、地方経済にとって極めて重要であった桟橋は、修理の必要があったため、賃貸借契約の放棄が承認され、土地は永代租借となった。[2] こうした状況下では、節約が常に行政のたゆまざる指導原理であった。カーコーディのような自治都市の特権は一九世紀まで大きな変革をうけなかったとはいえ、多くの特権が経済状態の変化によって、ずっと以前に削減されていた。スコットランド貿易の中心としてのフォースとファイフの長年にわたる評判は、内乱と空位期間に一時的に中断した（この時期にカーコーディはひどく世評を落とした）。それ以後、もっと深刻な長期的衰退がはじまったが、それが最も明白だったのは、クレイルおよびピッテンウィームの漁港であった。一六八〇年代央から、地方の地主たちは、彼らの所領地の鉱物資源を開発し、レーヴェン、メーシル、アバーダー、ウェスター・ウェーミスの石炭貿易を振興したから、カーコーディの既存の地位と評判もまた挑戦を受けた。一七世紀後半までに、カーコーディとバーンティスランドが得意としていた仲継貿易は不振となりつつあり、一六九二年には、カーコーディの海運業の時代遅れは港の衰退の一例として引用された。結局、スコットランドの西部諸港の力の増大がなお一層重要になろうとしていた。フォース湾岸はまだ多くの点でリードしていたが、活力のある貿易は西部にあり、新世界との貿易であった。

一七二〇年代には、地域社会はまだ旧来の因襲的方式によって支配されていたが、ついにはそれを呑み込んでしまうような変化の徴候を示していた。町議会は、自己保存的・寡頭政治的方式で運営され、議会代議制の変化によってさえほとんど影響を受けなかった。近隣の村むらの主たる製造業は、旧式の家内工業的基盤にもとづいて組織され

た、製釘業であり、繊維製造業とりわけ麻工業の奨励と発展があったとしても、活発なのはやはり貿易であった。

アダム・スミスは、ハイ・ストリートのある家に生れたが、これは彼が後年住むことになった家ではない。彼が洗礼を受けたのは一七二三年六月五日であったことは知られているが、誕生日は定かでない。彼の父は、やはりアダムという名であったが、二度結婚した。最初の妻はリリアス・ドラモンドといい、エディンバラ市長であったミルナブのジョージ・ドラモンド卿の長女であった。彼女は一七一七年ごろ、一児ヒューを残して死んだ。ヒューは一七〇九年に生れ、一七五〇年に独身のまま死んだ。ヒューは財産を処分していなかったので、異母弟のアダムが相続人となった。マーガレット・ダグラスとの再婚は一七二〇年であったが、この両人のただ一人の子供が生れる前に、父親は一七二三年一月二五日に死んだ。

アダム・スミスの父系家族の起源は、遠くアバディーンシャーに発し、小地主ではあるが、確立した家柄たる、ローシーバースベン、インバーラムゼイおよびシートンの三スミス家にある。直接の先祖はシートンに住み、多勢の子供をもうけた祖父のジョン・スミスで、父のアダム・スミスはその末子であった。多くの中小地主の家系によくみられるように、スミス家の人びとはさまざまな公的地位に就いた。エディンバラ在住の著作家であったスミスの伯父アレグザンダーは、スコットランドの収税官兼郵便局長であった。彼の従兄弟にはアバディーンの有力な市民ウィリアム・ウォーカーがいたし、アーガイル公爵がスコットランドの聖職授与者であった当時、アーガイル公の秘書を、他の役職とともに務めたウィリアム・スミスもいた。インバーラムゼイ系の同族には、キングズ・カレッジおよびマリシャル・カレッジの研究指導教授もいた。

アダム・スミスの母、マーガレット・ダグラスは、父方より家柄もはっきりし、親類筋もよいファイフの地主の出身であった。彼女の父はカークネスのウィリアム・ダグラス卿の次男であった。カークネスの地所は、ロッホ・レー

ヴェンのウィリアム・ダグラス卿がモートン伯爵第五世を継いだとき、スミスの曾々祖父にあたるカークネスのウィリアム・ダグラス卿の四男に分与されたのであった。母方の祖父は、再婚であったストラーセンリのヘレン・フォレスターと結婚し、彼女の死後、一六八八年に、バーレー卿の娘スーザンと再婚した。この両人の娘マーガレットは一六九四年九月一七日に洗礼を受けている。

アダム・スミスの両親の家系は身分の低いものではなかった。彼の母の財産は、大部分、当時多大の権力の源であった土地に基礎をおいており、彼女の父は、一七〇六年に死去するまで、一七〇三年以降スコットランド議会に議席をもっていた。しかし彼女の夫が名をあげたのは、むしろ、下級の役人階級と関係したためであった。父アダム・スミスの生涯は、その多くの親戚と非常に似通った歩みを示した。彼は一六七九年に生れた。アバディーンのキングズ・カレッジとおそらくはエディンバラで学び、その後ボルドーへ冒険旅行に出かけ、難破にも遭遇した。一七〇五年にスコットランド国務相となったラウドン伯爵ヒュー・キャンベルの私設秘書官としての登場は、彼がきっとより高い役職に就くだろうということを示していた。そして一七〇七年三月には弁護士会への入会を認められた。翌月には、彼をスコットランドの軍法務官に任命する辞令が出された。軍法務官は法的手続の全般を監督し、法廷が適切な注意を払わなかったと考えられる場合には、いかなる法的問題にも、彼の報告書のなかで言及する権限をもっていた。軍法務官は非常勤のポストにすぎなかったから、スミスは一七一四年のはじめに、彼の甥ウィリアム・スミスにその職をゆずるまで、ラウドン卿の私設秘書を引きつづきつとめた。辞職の理由は、彼がカーコーディの税関監督官に任命されたからである。同じ時期に、彼の従兄弟ハーキュルズもモントローズの同じ役職から地方収税官としてそこに赴任した。収税官は上級官史であり、監督官は彼をチェックする役割を果たしたが、両者は共同して法を施行した。

軍法務官とカーコーディの税関監督官を兼務していたから、アダム・スミスはめぐまれた地位にあった。前者の役

職からの収入は一三七ポンド五シリングであったが、後者からの収入は決定しにくい。それは種々の料金が入るために、公称所得を上回ったからである。とくに、免税で持ち込まれる物品はどれでも、検査料として価額一ポンドにつき一シリングが支払われたからである。事務官への支払費用は差し引かれねばならなかったが、合計すれば、アダム・スミスの収入総額は、年間ほぼ三〇〇ポンドであったにちがいなく、それは一家がある程度裕福に暮らせる額であった。父アダム・スミスが死んだ時に明らかになった他の証拠は、この一家の地位を示している。亡くなった時、スミスの父は、一〇〇冊にみたない小規模の蔵書をもっていたが、その約三分の一は神学と信仰に関する著作であり、残りは広範な関心のひろがりを示していた。入念に書かれた遺言は遺言執行人および後見人として印象的な範囲の友人および関係者を指名していた。一七二二年一一月一三日付の遺言の詳細は、社会的地位とある程度の財産をもつ人について示している証拠ほど重要ではない。

カーコーディにおけるスミスの少年時代については、直接の証拠からは詳しいことは実際何もわからない。その後の論評者たちの指摘するところによれば、スミスと母との疑もなく密接な、永続的な結びつきは、カーコーディにおけるこの幼年時代に築かれたものであり、そのような結びつきの親密さは、独り子でしかも父の死後生れた遺児の場合には、少しも不思議ではないとされる。彼の異母兄ヒューについての情報はなおさら少ない。彼はアダム・スミスの誕生の翌年パースの寄宿学校におり、病気になやまされていたようだし、そのため彼の指導教師たちは、カーコーディは彼の生活にふさわしい場所ではないと考えるようになった。それゆえ、二人の異母兄弟の間にはほとんど接触がなく、カーコーディの家庭は、実際上、母一人子一人で成り立っていたらしい。

一七三一年か一七三二年に、市立学校に入学した時からスミスの学歴は始まった。カーコーディは地理的に広大ではなく、人口も多くはなかったから、その教育設備はスコットランドの他の多くの地域と同程度に整っていた。そし

て一八一八年には、教区学校のほかに通学学校は一二校あったから、「教育を望むすべての者にとって十分な教育手段が存する」[3]と報ぜられていた。しかしスコットランドにおける教育の進歩途上での大きな障害は、学校教育がしばしば事態を向上させる道であった時代に、常にある程度疑問であった校長の能力にあった。しかしスミスは校長がデイヴィッド・ミラーであったことで、おそらく運がよかった。ミラーはスミスの母と遠い姻戚関係にあり、町議会による学校建設の企図の一翼として、クパーからカーコーディへ出てきていたのであった。一七三三年に、議会は「教授方法と遵守規定」についての詳細な覚書を発表したが、校長とその助手が、主にラテン語で教える六クラスの授業に対して設定された複雑な取決めを、それも窮屈な二教室内で、果たしてどこまで実行することができたかは疑問である。この厳しい体制の下でスミスが学業にはげんだことについての現存する唯一の証拠は、一七三三年付けの彼のラテン語の教科書 *Eutropius* である。ミラーと彼の助手は若いスミスを十分に教育することができたし、スミスもまたその教育に耐えることができた。それは害を与えなかったのみならず、分業の有害な影響を相殺するためにとられるべき一例として、スミスをスコットランドの教区学校に推賞することができる程度の、十分賞讃に値するものであった。しかしながら、教区学校でラテン語を不断に勉強させられていたら、スミスはカリキュラムを少し変更するよう提案したかもしれない。

> スコットランドでは、このような教区学校という制度は、庶民のほとんど全部に読むことを教えてきたし、またその大部分の人びとに書くことと計算を教えてきた。もしこれらの小さな学校で、子供たちに読むことを教えるのに使われる書物が、普通そうであるよりも、もう少しためになるものであれば、またもし庶民の子供たちが、ほとんど何の役にも立ちえないラテン語のちょっとした生かじりをときどきそこで教えられる代りに、幾何学や機械学の初歩を教えられるようにすれば、この階層の人びとの教養教育は、おそらくもっと完全に近いものになるであろう。[4]

カーコーディの市立学校は、国際的名声につながる教育の道にスミスを赴かせた。この学校はまた、彼に永続的な友人関係を与えたが、そのうちの幾つかは、ちょうど同じ頃すばらしい少年たちが市立学校に出席していたことに根源をもつ。記録は何も残っていないし、特に、カーコーディ時代の友人の幾人かは正確な同時代人ではなかったので、市立学校への出席がどの程度までかさなっていたかは不明である。

公生活においてある程度有名になった知人のうちの二人は、――彼らに対してスミスは全く違った評価をしていたが――地方の有力地主として、地域社会の生活を支配していたダニキアのオズワルドの息子たちであった。オズワルド家とスミス家の結びつきは固く、これはファイフ州の中小地主社会においてスミス家が受けいれられていたことを示していた。スミスの父が死んだ当時、ダニキアはジェイムズ・オズワルド[11]が所有していた。彼は一時カーコーディ市長をつとめ、一七〇二年から一七〇七年までは連合（彼は終始これに反対投票していた）以前の最後の議会の議員であり、一七一〇年から一七一五年まではずっと連合議会の議員であった。彼は父アダム・スミスの遺言に立ち会い、それによって任命される代理管理人（受託者）の一人となり、彼らの代理人として行動したが、長きにわたってその義務を果たすほど長生きはしなかった。彼の息子のジェイムズはまだ未成年の時にダニキアを相続した。アダム・スミスはジェイムズ（一七一五年―一七六九年）と弟のジョン（？　―一七八〇年）とほぼ同時代人であった。彼らはそれぞれカーコーディから離れたところで出世したが、方面は違っていた。ジェイムズは一七四一年から死ぬまで下院議員であり、一七六三年から枢密顧問官、一七四五年から四七年まで海軍長官、そして一七五一年から六七年まで通商長官、財務長官、アイルランドの統合財務副長官を歴任した。弟のジョンはクロンフェルト、キルマックドー、ドロモア、ラフォーの主教も歴任した。スミスとジェイムズ・オズワルドとの結びつきは明らかに親密であったし、そういう状態がずっと続いた。彼はスミスが、サースフィールド伯爵であれ[5]、後にプルトニーという名の下で富

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com